

CAPNA

キャプナニュースレター59号

金融危機の不況風が吹きさすさぶ年明け。サラリーマンたちの話題も、残業カットやリストラなど、暗くなりがちです。

1998年に不況が深刻化した際にも、自殺や親子心中が増えました。親のストレスはしばしば、子どもの人生に大きな影響を与えてしまいます。

こんな時代だからこそ、きめ細かな援助がますます大切になっていきます。

今年もCAPNAをよろしく願いいたします。

Vol. 59

子どもたちの笑顔が励みに・・・

愛知万博を契機に発足したCAPNA劇団「チャイルドスターズ」も早3年を迎え、益々元気です。08年度は愛知県の「入学前園児健全育成事業」の委託を受け、「気持ちを話そう」プログラムを引っさげて要請を受けた県内の幼稚園や保育園を巡回しています。

訪問した先々では、いろいろな子どもたちが待っていてくれました。(どんな気持ちもひとりで抱え込まないで安心できる人に話すと心が軽くなるよ)というワークショップを通して、自分の気持ちを感じて言葉にしてほしいと思って工夫を凝らしています。

先日訪問先の園長先生から頂いたお便りの中にこんな嬉しいものがありました。「けんかが起こったときに周りにいた子どもたちの中から「気持ちを伝えよう」との声があり驚きました。」ワークショップは短い時間でしたがきちんと子どもたちの心に伝わったようで疲れが吹き飛びました。

まだまだチャイルドスターズで何ができるか試行錯誤の毎日ですが、子どもたちの笑顔を励みに来年度も新しいことにチャレンジしながら子育て支援をしていきたいと張り切っています。

何か良いアイデアがありましたらぜひご意見を寄せてください。また、一緒に活動されたい方、大歓迎ですのでご連絡をお待ちしています。(つ)



CAPNA 市民講座 09 のお知らせです

映画「青い鳥」(重松清原作、阿部寛主演)と対談(愛知教育大学副学長の折出健二さんとキャプナ弁護団の杉浦宇子さん)を2009年3月7日(土)、ウィルあいちにて午後1時半より行います。会員は無料、一般は500円で入場できます。詳しくは同封のチラシをご覧ください。先着200名様に「おつ」のしるしを差し上げます。多くのおみなさまのご来場をお待ちしています。

ご寄付 次の皆様からご寄付をいただきました。お礼申し上げます。

【個人】 服部恵子、神田直子、尾崎まゆみ、渡辺弘子、木村剛、矢満田篤二、稲沢市役所児童課有志、小林舞、椋山女学園大学附属幼稚園PTA、田島淑子、中川ひで子、兼田智彦、onebyone子ども基金、今西雄一郎、在日米商工会議所、水野真由美、菱田理、西村清美、爾見かね子、二橋淑恵、掛野由聖、水野正三郎、石川知子、東野玲子、田辺晴子、杉浦登喜子、GIVEONE(NPOパブリックワーカーズセンター)、田村佳子、岩本佐恵子、坪井絹美、鶴本康彦、隈元真理子、白石淑江、小久保裕美、柳川佳延、他匿名13名

【ボランティア募金】 柳原通商店街振興組合、柳川佳延、ID:69、名古屋自力整体研究会、近藤昭子、尾張旭市子育て支援室、女性会議 WIT、細谷恭子、山本秀樹、安田善司、服部隆洋、神戸市高取山ふれあい街づくり協議会、富田正美、高浜市立南中学校、他匿名3名

CAPNAニュースレター59号 (隔月刊43号)

2009年1月31日発行

発行 特定非営利活動法人 子どもの虐待防止ネットワーク・あいち

編集 CAPNA事務局広報チーム

印刷 社会福祉法人名古屋ライトハウス光和寮

事務局 〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-4-404 TEL052(232)2880、FAX052(232)2882

広げたい 訪問支援 応えたい 相談者のニーズ

JaSPCAN ひろしま大会レポート

日本子ども虐待防止学会ひろしま大会が昨年12月12-14日、広島市の国際会議場などで行われました。CAPNAから参加したメンバーのうち3人の報告を紹介します。

予防の取り組みの広がりを実感

広島平和記念資料館に立ち寄ってから、評議員会に出席しました。評議員会では、私が関心を持っている虐待予防に関する提案が、小児科医や母子保健関係者から出され、私も「健康な家族アメリカ（HFA）」の家庭訪問支援が成果をあげていることについて発言しました。これまで、早期発見、初期対応、保護などに力が注がれてきましたが、予防の取り組みについても論じられようになってきたと思います。

実際、大会の分科会でも、予防に関連するテーマが増えています。ひろしま大会では、28分科会のうち3つが予防に関するものでした。他に、23の会場に分かれて一般演題の報告も行われました。私は、平成20年より「乳児家庭全戸訪問事業（こんにちは赤ちゃん事業）」と「養育支援訪問事業」が児童福祉法に位置づけられたことに関連させて、赤ちゃん訪問の取り組みの実情と課題について報告しました。

「こんにちは赤ちゃん事業」については、いくつかの検討すべき課題があります。一つは、対象家庭の乳児の月齢です。母親たちはもっと早い時期からの支援を求めており、生後4ヶ月では遅すぎるのではないかと、という意見があるのです。実際、米国オレゴン州のヘルシー・スタートでも、生後14日以内に1回目の訪問を行い、その後6ヶ月間集中的な家庭訪問支援を行うことで成果をあげています。母子手帳の交付や妊婦健診の段階で、家庭訪問支援を希望する家庭を把握することも可能ではないかという意見も多いのです。

もう一つは、訪問スタッフの問題です。厚生労働省は、愛育班員、児童委員、母子保健推進員、子育て経験者等を幅広く登用することを提案していますので、市町によって担当者がいろいろです。名古屋市の場合は、既に平成9年から、主任児童委員が子育て支援活動として「赤ちゃん訪問」自主的に行って来た経緯があるため、全16区で実施することになりました。そして、対象も生後3～6ヶ月の乳児を持つ家庭とし、市の独自事業として位置付けています。そして、「こんにちは赤ちゃん事業」は、保健師、助産師により、新生児訪問等を含めた形で実施することになりました。訪問スタッフの専門性を考慮した結果です。

主任児童委員などによる「赤ちゃん訪問」の実施率は転居による不在を除くと97%（平成19年度後期）であり、受け入れ状況は良好です。そして、結果的には、乳児のいる家庭を訪問する機会が増え、孤立しがちな家庭を地域につなぐ可能性を少し広げることになりました。主任児童委員が中心となって、各小学校区で開催されている「子育てサロン」に参加する母も増えています。もちろん、ヘルシー・スタートのような家庭訪問支援を目標とすれば、まだスタート・ラインにも立ち得ない状況です。しかし、家庭訪問支援を普及するという意味では、確かな一歩が踏み出せたと言えるでしょう。

何年前かに、3ヶ月前後の乳児を持つ母親の電話相談を受けたことがあります。「家から一歩も出られない」「大人と普通の会話がしたい」「たっぷり眠りたい」と訴えていたことが思い出されます。これから、家庭訪問支援が本格的に実施される時代が来ることを願っています。

(理事 白石淑江)

メール相談の可能性高まる

CAPNAが事務局を務める「日本子どもの虐待防止民間ネットワーク」はこの大会で、電話・メール相談の分科会を企画し、私が座長を務めました。

虐待防止や子育て支援の電話相談は、市民団体をはじめ行政でも行われています。これらの電話相談は利用者のニーズにどの程度こたえているのでしょうか？ 電話相談を行っている相談員の養成や研修の内容、危機介入的な内容の電話相談にどのように対応し、次につなげていくのでしょうか。また、電話相談だけでは利用者のニーズにこたえきれない現実があり、メール相談や掲示板相談など新しいメディアでの相談活動への取り組みも始まっています。これらの相談活動の手法やノウハウについて学ぶ機会としたいという狙いでした。

講師の田村毅さん（東京いのちの電話）は、いのちの電話やひきこもり相談の実践から、市民団体の行う電話やメール相談のスタンスとして「良き隣人としての立場」をあげ、その目的に沿った聴き方、受け方があるとの話をされました。メール相談を実践していることから、メール相談の基本的な考え方やその手法について話されました。メール相談は、文字のみということで利用者のチャンネルが限られているが、手軽さという点では利用者にとって使いやすい道具であり、今後利用者が増えていくのではないかとのことです。子どもの虐待防止センター（東京）、児童虐待防止協会（大阪）からは、それぞれの行っている虐待防止電話相談の現状についての話と、メール相談への危惧が話されました。CAPNAの柳川佳延さんの発表については、以下、本人のレポートをご覧ください。（専務理事 兼田智彦）

イギリスやドイツなどメール相談を先行している国でも、虐待相談でメールを使っている事例はまだないようで、今回のCAPNAメール相談の実践報告は貴重なものになりました。しかし、それだけに理解を得ることは大変難しく、虐待相談でメールを使うことそのものに反対の立場をとる民間ネット加盟団体もありました。フロアからのご意見やご質問は、自分たちが実施するとしたらこういう点がもう少し知りたいという内容で、これからの時代のことを考えると必要性は分かるが、準備にもう少し時間をかけたいというところで収まったようです。

アンケートの集計結果からは、「電話、メール相談のメリット・デメリットが分かった」「改めて電話、メール相談の大切さの実感した」といった感想のほか、相談スタッフなどの育成やメンタルヘルスなど、新しいメディアへの対応が課題といった声も聞かれました。「メール相談は「治療」、「care」の枠に入るのではないかと」というご意見があり、個人的には「書くという人の営みがその人の心に及ぼす効果」についてよく分かっていらいっしょという印象を持ちました。

メールという相談はこちらがカウンセリングをするつもりがなくても（相談ですから当然ですが）利用者さんは、自らが抱えている課題を「リフレーミング」という方法で問題解決する効果があります。

「ナラティブ・セラピー」の理論がメールにもよく当てはまります。実際、メールはかなり落ち着いた状態で書かれる場合が多く、読んでもらうことを前提にして、何度も書いては消してということが繰り返されます。1行書いてはそれを読み返して時間が過ぎて行きます。その間、冷静に自分と対話しているのです。これが書くことによるナラティブ・セラピーです。これを東京学芸大学の田村毅教授は「自己語り」と呼んでいます。そこには書いている自分と書かれている自分と過去の自分と今の自分もいます。その結果自分を見つめ直すことができ、問題解決につながっていきます。メール相談に対するご理解が深まることを祈念いたします。

(理事 柳川佳延)

Nobody's Perfect プログラム 体験とフォローアップ講座

(完璧な親なんていない)

NPファシリテータグループ・さんもつくの企画によるNPの体験講座を開催しました。2008年11月25日(火)つながれっとNAGOYA 特別セミナールームを会場に、浜松児童相談所の臨床心理士でありNPマスタートレーナーでもある柴田俊一氏を講師にお招きしました。講座には子育て支援にかかわる行政や民間から33名の参加があり、さんもつくスタッフ5名と愛知県からのNPO研修生2名も参加して一日が展開されました。

午前中は講師による講義

パワーポイントで用意した資料を用いて、Nobody's Perfectプログラムが必要な社会的背景の説明があり、今の社会構造や核家族化による育児能力の低下で、虐待を受けている子どもあるいはグレーゾーンにいる子どもが増えている現状が伝えられました。

臨床心理士として虐待を受けている子どもの様々な状況を広く知っていることから、被虐待児の様子が資料を通じて分かりやすく示めされ、子どもが置かれた悲惨な状況がわかる講義内容でした。

親の育児能力を高める虐待予防活動を増やしていかないと、虐待の減少は望めない状況があるなかで、Nobody's Perfect (NP) も親のためのプログラムです。内容は参加者中心、親の参加的かかわりから親自身が主体性をはぐくみ自ら問題を解決できる力をつけていくことを目的としているプログラムであることが分かりやすく伝えられました。



午後はNPプログラムの体験

午後もほとんどの参加者がプログラム体験に参加して、総勢32名の多数でNPプログラムがどのように展開されるかを体験しました。



少人数のグループから始めて、お互いになじみ合うためのアイスブレイクやウォーミングアップを通してだんだんグループの輪を大きくしていく方法を体験し、そうすることで自分が安心して発言できることなどを参加者が体験できました。お菓子やお茶もプログラムに欠かせない部分として体験、最後には最初に作った二人のグループに戻ってお互いに相手をほめるワークを行い、人と人との関わりにおいて大切なことを参加者がそれぞれ確認できるワークを楽しく体験しました。

オレンジリボンキャンペーン

ご協力いただいた2団体の紹介

2008年12月21日(日)

柳原通商店街振興組合

毎年オレンジリボンキャンペーンの時期になると、声をかけてくださる柳原通商店街振興組合長の岩田さんから、「もちつき大会をやるから来てね」と声をかけていただきました。

少し小雨になったりしましたが、例年より暖かい師走の一日になりました。今回は、金山駅でストリートライブをしていた2人組(大阪から来ていた若者です!)を岩田さんが引っ張ってきていて、すぐに人の輪ができました。

でも何といっても目玉は中日ドラゴンズの浅尾選手の来場です。実は朝の4時半から並んでいた熱心なファンもいたとかで、いつもは静かな柳原公園もオープン前にはものすごい人ばかりでした。浅尾選手を一目見ようと、地域の人だけでなく名古屋市内外から駆けつけた方もおられて人気の凄さにびっくり。

名古屋市からオレンジリボンキャンペーンののぼりをお借りして、オレンジリボンを配布しました。すぐに胸元やかばん、帽子やマフラーにつけて下さり、いつの間にか参加されたみなさんが付けていてくれた様子には感激しました。もちろん浅尾選手も、です。

トークタイムで「クリスマスはどう過ごされますか?」の質問に「孤児院に行きます。」との答え。終わってからCAPNAのスタッフ

が現在は児童養護施設という名称であることや、そこで生活している3分の2の子どもたちは児童虐待の被害を受けていることなどを話しました。浅尾選手は熱心に聞いてくれました。

もちつきのぜんざいは絶品でした。またサイン会の色紙代金や模擬店の売り上げなど寄付していただき、身も心も温まりました。商店街の皆さん、ありがとうございます!ちなみに柳原通商店街は地下鉄の「市役所」か名鉄瀬戸線「東大手」下車北へ徒歩5分です。

名古屋赤十字社愛知会
北区地区



2009年1月7日(水)

高浜市立
南中学校

年が明けて最初の始業式。

そこにCAPNAの理事である石田が感謝状を手立っておりまして。

実は熱心にオレンジリボン募金の活動をしてCAPNAに寄付して下さる生徒のみなさまへ心ばかりの感謝状を持ってお礼を申し上げ

るため訪問しました。

生徒会が中心になってオレンジリボンの趣旨を理解して地域で、精力的に募金活動をして下さり、大変感謝しています。

生徒の皆さん、支えられている先生方、地域の皆さん、ありがとうございます。